プロローグ

「アナウンサーになるので会社を辞めることになりました」

24歳のとき。社内の皆さんにあいさつ回りをしました。

「は……アナウンサー？」

だいたいポカンとされました。華やかな広告代理店で、私はアシスタント的な業務をしていました。いわゆる楽な仕事でした。

社内の景気がよい時代。よくおいしいものを食べに連れていっていただいたし、部長クラスの方々には銀座の夜のお店に何度も連れていっていただきました。人生の中でもおいしい時代だったと思います。

毎日楽しかったし、華やかな友達もたくさんいました。イケてる男子に出会う機会もた

くさんありました。
でも、私は辞めたかったのです。あまり頭をつかわない毎日に、どんどんバカになっていくのがわかったから。恵まれた環境でもしっくり来ない。ここは私の居場所じゃない。いつまでもここにいてはいけない。

当時、私はＯＬをしながら、アナウンサーやＤＪを目指す専門学校にも通っていました。実は新卒のときに局アナ試験を受けたのですが、全滅。
あきらめきれずに専門学校に通い、フリーアナウンサーの大手事務所に入ることができました。そしてオーディションに合格。東京都文京区のケーブルテレビ局の契約キャスターになることができました。小さいながらも局アナのような仕事。デビューとしては恵まれていたと思います。
短い期間で退職の手続きをしました。そして冒頭に戻ります。

「は……アナウンサー？」
なぜ君が？　どうしちゃったの？

そんな反応をたくさん受けました。にやりと片頬を上げながら「がんばってね」と言った人もいました。もちろん、新たな門出をお祝いしてくれる人もたくさんいました。

華やかで楽しかったけれども、先が見えなかったＯＬ生活。

一方、規模は小さくても夢見ていたアナウンサーの仕事。充実度は雲泥の差でした。

やっとスタートしたアナウンサーキャリア。

小さくても局アナ的な仕事、首都圏のＦＭラジオ局である「ＦＭ　ＮＡＣＫ５」のパーソナリティー、イベントのＭＣなど、それなりに仕事はいただいていました。

けれども、特に売れっ子というわけではありませんでした。だからこそ一つ一つの仕事を大切にしました。電話やメールの連絡。現場入りして本番を迎え、終了して退出するまで。できる限り丁寧な対応を心がけました。

それらが功を奏したのか、いつの間にか「次も喜多村さんで」と多くの指名をいただけ

るようになりました。

それが信頼となり、著名なタレントさんやスポーツ選手のイベント、国内外に名を馳せるビジネスリーダーのセミナーＭＣまでも務めるようになりました。大きな仕事がすんなりといただけるようになってきたのです。

さらには人を育てる研修の依頼もいただくようになりました。最初は大手百貨店に入る和菓子屋さんのスタッフ研修でした。

マスコミでも話題の行列のできる人気店。お客さまの期待値も高く、ちょっとしたことがクレームになってしまうとのこと。このお店のフードプロデューサーを務める友人から「研修をしてほしい」と依頼をいただきました。

しかし、やったことがない。一旦は断ったのですが「あなたが人前に出る仕事で気をつけていることを教えてあげて」と言われ、引き受けることにしました。

当時は、お手本となる書籍の存在すら知りませんでした。

私、いつも何に気をつけていたっけ？

自分を絞り出し、Ｗｏｒｄでベタ打ちしただけのヘタクソすぎるテキストをつくって臨んだ初めての研修。閉店後の遅い時間に熱心に受けてくれたスタッフさんたち。そして後日、友人から来た連絡。

「ありがとう。翌日から皆、激変したよ！」

これをきっかけに「人が変わる、成長する素晴らしさ」を知りました。講師としての勉強を重ね、アナウンサーと並行して研修講師の顔も持つようになりました。

あるとき、同業の女性から、ふとこんなことを言われました。

「喜多村さんのコミュニケーション能力は半端ない」

え、そうなの？　他の人と違うことやってるの？

そのうち、身の周りで起こったことや感じたことをＳＮＳに投稿するようになると、多くの反響をいただくことがよく起こりました。

友人と話していて「あ、そう考えればいいのね！」「そうか！　すっきりした。ありがとう！」と言われることも増えました。

「ねぇ、本書けば？」

そう言ってくれる人もちらほら現れるようになりました。

そうか、本か。いいなそれ。

ぼんやりと将来の夢の一つになりました。

あれから６年。今、それが叶いました。

大きな武器はなくても、コミュニケーション次第で人生が好転していく。それを伝えたくて書きました。

芸は身を助く、よろしく、コミュニケーションは身を助く。

この本が、あなたのこれからの人生のヒントになれば、これほど嬉しいことはありません。